

[評者]
大平善之
国際医療福祉大主任教授・
総合診療科



マイヤース 腹部放射線診断学 発生学的・解剖学的アプローチ 太田光泰，幡多政治 監訳

●B5・頁400 2017年1月
定価：本体14,000円＋税
[ISBN978-4-260-02521-8]医学書院刊

総合診療のエキスパートである太田光泰先生(足柄上病院総合診療科・担当部長)と放射線腫瘍学のエキスパートである幡多政治先生(横浜市立大大学院教授)が監訳された、腹部放射線診断学を体系的に学習できる世界的名著“Meyers' Dynamic Radiology of the Abdomen, Normal and Pathologic Anatomy, sixth edition”の日本語訳版である。第1章に書かれている通り、本書は、「疾患の進展経路を説明すること」を目的に執筆された書籍である(p.18)。腹部のみならず、骨盤腔、胸部との関連について、発生学、解剖学に基づいた解説がなされている。

本書は第1～17章で構成されており、第1章では、腹膜腔内臓器間での進展、腹膜腔内と腹膜外腔との間での進展など、画像診断の進歩により、従来の区画化に対する画像解析では疾患進展による徴候を十分に説明できないことが明らかになったことによる新たなパラダイムの必要性が論じられている。臨床推論において想起できない疾患は診断できないのと同様に、画像診断においてもプレコンディショニング(予想、事前情報、経験)が視覚情報の多くを決定することが示されている。また、臨床推論では、最初から細部に注目する

のではなく、まずは患者の全体像(ビッグピクチャー)を把握することが重要であるが、画像診断においても全体として見ることの重要性が解説されている。

第2章では腹部の臨床発生学、第3章では腹部の臨床解剖学について記載されている。第4章以降は、腹部と骨盤部、腹腔内における感染症と播種の進展様式など、発生学、解剖学に基づいた疾患の進展様式と画像診断との関連についての重要性が詳述されている。病歴、身体診察からの臨床推論においても発生学、解剖学、生理学、生化学などの基礎医学の知識を基に病態生理に基づく診断アプローチが重要であるが、画像診断においても同様であることを再認識した。

腹部、骨盤内疾患の発生、解剖に基づいた疾患の進展様式と画像所見との関連について詳述されている書籍を、少なくとも私自身はこれまで読んだことがない。本書のような有用な書籍を日本語で読めることは、専攻医、放射線科医、消化器外科医、消化器内科医、救急医はもちろん、われわれ総合診療に携わる医師にも学びの機会を広げる。ご自身の医学書コレクションにぜひ、加えていただきたい1冊である。